

これからのコミュニティと生活者の課題

須賀由紀子

現代生活学科 生活文化研究室

The Issues of the Community and the Autonomous Citizen in Japan

Yukiko SUGA

Department of Studies on Lifestyle Management, Jissen Women's University

Under the circumstances of population decline and the revitalization of local communities, the author searched for the issues of the community in the future and the individual's way of life as the autonomous citizen in Japan, by inspecting the several theoretical concepts about community and two case studies of Machi-zukuri, one a project to make good use of traditional local foods and the other a performing arts festival.

As a result, the ideal form of future community would be based on localism. And the best way to be an autonomous citizen would be to value the agricultural life in today's urbanized life, because it would need rethinking about relationships between nature and human beings, and the roles of collaboration and of hand-made goods values.

Key words : Community (コミュニティ), Collaboration (協働), Farming (農), Nature (自然), Autonomous Citizen (生活者)

1. はじめに

少子高齢化による人口減少社会の到来および環境親和型社会への移行という二つの現実的課題を踏まえ、「定常型社会」という考え方が、ポスト産業社会のあり方として提起されている(広井 2009 ほか)。定常型社会とは、「(経済) 成長ということを絶対的な目標としなくても、十分な豊かさが実現される社会」である。その特徴は、必要以上の労働に追われたり、組織の歯車としての競争に苛まれるような生き方ではなく、日々の営みを築くローカルな暮らしの中で、自らの身体と心を働かせて人間的な生き方を豊かに享受し、主体的に暮らしを拓く可能性に満ちた社会と捉えられている。それは、元気がない後ろ向きの社会ではなく、「自分自身が生きる現場で、小さくても自分の夢を育てていく、むしろスリリングな社会」であるという¹⁾。そうした暮らしをよりよくしていくのは、自分のアイデンティティとなる「コミュニティ」の存在であろう。都市化・産業化・情報化が進展するにつれ、地縁的コミュニティの喪失が指摘されている

が、そのような中で、改めて、心の拠り所となる活力ある生きたコミュニティを自らの手でいかに作り出すかは、これからの時代の新たなる課題である。自身を取り巻くコミュニティに主体的に関わる暮らしができること、もしくは、そうしたコミュニティ形成の主体者となることは、これからの自立した生活者のありようとして大切な視点と考えられる。

本稿では、上記のような問題意識を背景として、これからの生活者とコミュニティの課題を総括的に捉え、定常型社会の暮らしに必要な生活技術について論考する。

まず、これからのコミュニティの考え方について、生活者論の視点をふまえて理念的に捉える。次に、今日の新しいコミュニティ創造の手法である「まちづくり」の展開事例から、コミュニティ形成の過程に生じる課題を考察する。以上二つのアプローチからの検討をもとに、最後に、これからのコミュニティと生活者としてのあり方について考える。

2. 現代生活者の課題としてのコミュニティ

2-1. 人間とコミュニティ

「コミュニティ」という用語は、その言葉を使う論者によって捉え方がまちまちであり、「多義的で、曖昧なもの」である（坂田編 2014: 13）。しかしながら、「地域性と共同性という二つの要件を中心に構成されている社会」ということでは大方の一致をみるとされる（森岡編 1993: 478）。複数の人間の結合および共同により「社会」は生まれ、人間は「様々な社会的結合に関与しながら生活を営む」のがその本性である（同上: 591）。ここではまず、現代のコミュニティについて考えていくにあたって、人間にとっての社会の意味から捉えておきたい。

河合（1990）は霊長類の社会生態学的研究を通して、人間にとっての社会の必要性を説明している。それによれば、進化の過程の中で、地球上の「森林空間」を取得した哺乳類はサル類のみであり、天敵もない中、個体が増えすぎてしまうのを防ぐために、自ら産児数制限を加えるような形態に進化した。その中で、直立二足歩行という生態を習得し、「生理的早産」と言われる未熟な状態で生まれる人間の特性が生じるようになった。生理的早産により、ほとんど何もできない状態で子どもが外界に産出される結果、必然的に育ちには手がかかるようになり、絶対的な母子の濃密な関係の原点がここに生じた。一方、オスには、食糧獲得の意味でも、外敵から母子を「守る」という意味でも、「父親」という役割が生まれ、家族の生活が形成されることになった。このように、種社会の存続の中に、必然的に「愛」を必要とするよう進化したのが人間であり、したがって、人間であるためには、他者との関わりの中で育まれる「愛」が不可欠なのである、という。「愛することと生きることと一体化して生きる」のが人間であり、愛は、母子間、父子間、そして家族、他の家族集団と幅を広げつつ、コミュニティ形成の原動力となる。このように、人間は生態学的にみて、社会的動物であるよう進化したことが説明される。

一方、古代ギリシアのアリストテレスの哲学を紐解けば「人間は本性上ポリス（政治・国的）動物である」という言説があり、人間が人間であるためには社会が必要であることが述べられている²⁾。動物の中で、人間のみが言葉（ロゴス）を持ち、善悪正邪等に

ついでに知覚を有する。それにより、蟻や蜜蜂の集団とは違い、慣習をつくり、法律をつくる。こうした人間の本性上、人間としての最善の生活を実現するためには、国（ポリス）の中での共同生活が必要なのである。従って、国（ポリス）は自然的なものであり、国（ポリス）は、家や個人よりも先立ってある。全体と部分との関係からして、人間の存在の中に「集団の中に生きる」という要素は組み込まれている。このようなアリストテレスの人間理解からみれば、「社会には目的や一定の企図があり、これを実現するとき、個人が完成する」のである（田村 2013）。

進化の過程で直立二足歩行という生態を取得した人間は、「愛」を独自の形で形成した。一方、直立二足歩行は脳の発達をもたらし、人間はロゴスの存在となった。この両方から、「人間である」ということ的前提に、社会は所与のものとしてあることが説明される。そうした人間と社会の関係を踏まえれば、コミュニティの中に生きるという生き方そのものが、人間性を豊かにしていく営みと考えられる。人間らしく生きるという課題とコミュニティ形成は、人間という存在の原初に横たわる課題といつてよい。

今日、地域社会や地域生活の中の連帯性や共同性が失われ、また高度情報化が進展する中で、社会的疎外が拡大し、個人の孤立や主体性の喪失が問題視されている³⁾。失われた連帯性の回復と新しい共同性をいかに形成するか。そうした課題が意識化される中で、地域性と共同性という二つの要件を兼ね備える「コミュニティという社会」の再生が、現代的テーマとなっているのである。

2-2. 「生活者」とコミュニティ

コミュニティの中に生きるのは、一人ひとりの個人である。その「一人ひとり」の主体的な生き方を問う言葉に、「生活者」という言い方がある⁴⁾。「生活者」とは、文字通り市井にある人々のことだが、あえて「生活者」という言葉を使うのは、自らの生き方や暮らしの意味を問い、よりよい生活を主体的意志を持って築こうとしていく人、という主体性ある姿勢を含むところにある。生活者論を展開している天野によれば、生活者とは、「生産や消費、労働や余暇、福祉や環境など、『生活』を細切れではなく、総体として把握し、社会の支配的な価値からの自律を求める人

たち」と定義される(天野 1996)。暮らしの全体を考え、自分を取り巻く社会に対して、問題意識を持ってみるまなざしを持っており、その問題解決に向けて、自らの手で「よりよい暮らし」を取得し、それを社会に押し広げようとする志向性を持つ人である。

「よりよい暮らしを築こう」とする生活者像の一つの原型は、戦前から戦後に出た三木清や今和次郎らの生活文化論に求められる。それは、生活そのものを人間が作り出す文化としてとらえ、それをよりよくしていくために、伝統的な暮らしを新しく生かしたり、新しい合理的精神を取り入れたり、余暇の暮らしを大切にすることを通して、精神の豊かさに心配る暮らし方を大事にしようという考え方である。

もう一つは、日本が戦後復興を果たして平和や豊かさの実感を得るようになった1960年代後半から1970年にかけての市民運動にそのルーツを求めることができる。それは、生活クラブ生協の取り組みに代表されるようなものである。企業によって大量生産で作られ、大量販売される商品の質に疑問を持ち、「本当によいもの」「あるべきもの」に立ち戻ろうとする。そして、そういう問題意識を共有できる者同士の協同と自治のコミュニティを、家庭の「ソト」に意識的に作り出し、その中で「運動」としての活動をするを通して、生活革新や社会変革へ寄与しようとする人々の生き方であった。日常の暮らしの品を通してグローバルな問題を考え、安心・安全な食品を手にしたと生産者と消費者を直接に結ぶことを考え、問題の解決のために多様な価値観を持つ人同士の結びつきや協働の中で、自分たちにとって意味あるものを取得していくことを選択する。「意味ある関係を紡ぐなかの個人」という「生活者」の条件を兼ね備えた主体的な暮らしのありようが生まれたのであった。それは、今日の地産地消や顔のみえる生産者とのつながり、産直を求める動きなどの原点といえよう。しかしながら、当時は、共感者を作るための働きかけにはエネルギーを要し、その活動の継続は簡単なことではなかった。

こうした二つの流れを底流に持ちつつ、1980～90年代にかけては、「豊かさ」を享受した時代の中で、企業が人々の多様な価値観を受け止め、よりきめ細やかなサービスを提供するスタンスに立って「お客様」を捉える言葉として、また、政治家が大衆サイドにたっていることを示す言葉として、「生活者」とい

う言葉は、ある種思想性を失い、政治や経済に役立つ便利な言葉として使われていく。そうした中、たとえば、「足元の暮らし」から考えるはずの生協も、「良品を扱い、生産者と消費者をできる限りつなぎ、暮らし方への提案をする」という理念は持ちながらも、注文すれば個人宅配で配達してくれる、忙しい現代人にとっての便利なスーパーようになった側面が否めない⁵⁾。

そして今、人口減少、少子高齢化、環境制約といった現代的課題の中で、あらためて「本当の豊かさとは何か」「意味ある生き方とは何か」「生きることの実感を伴う働き方や暮らし方とは何か」が問われるようになっていく(猪木編 2014)。国民の意識調査では「拡大・成長ではなく、生活の豊かさや質的充実が実現されるような政策や地域社会を追求していく」ということに対して高いスコアが得られる実態がある⁶⁾。このような時代を迎え、「生活者」という言葉は、再び本来の「主体」を取り戻し、主体性ある自立した個のあり方を捉える言葉として使われるようになった。

今日的な生活者であること条件として、①近代化の中の環境破壊、共同体破壊の中で失ってきた「自然と人間との関係性の結び直し」②グローバル経済の中で見失われてきた「生産者と消費者との関係性の結び直し」③都市化・情報化・核家族化にともない、身近な人と人とのつながりの希薄化の中で喪失した「それぞれが異なる存在としての、他者を手段化しない人間と人間との確かな関係づくり」の3つの視点を天野は挙げている(天野 2012: 40)。自然と人間、生産と消費、そして人間と人間という、3つのフェーズにおいて、自分の日常生活が見わたせる生活圏の中で、つまりローカルな暮らしの中で、本来あるべき関係性を問う暮らしを築く。その関係性の結び直しへの意識を持つことは、人間存在の本質への問いと重なる。そうした思いを共有できる人と人とのつながりを、かつての肩肘のはった社会運動としてではなく、持続可能な私たちで作り出していけるか。そこに、今日のコミュニティの課題はあるのではないだろうか。人間としての本質に根差した生の意味を感じ取ることのできるコミュニティを、足元のローカルな暮らしにおいて、いかに内発的に主体的に形成するかが、生活者であることの課題となる時代を迎えているといえよう。

2-3. 定常型社会におけるコミュニティのあり方

では、これからの生活者としての生き方の受け皿となるコミュニティは、どのような性格を持つものとなるであろうか。この点について、ここでは、「定常型社会」を提起する広井の議論に基づき、その特徴を捉えてみよう。

広井は、コミュニティを「人間が、それに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」とする（広井 2009：11）。そして、現代社会に存在するコミュニティを、①「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」②「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」③「空間コミュニティ（地域コミュニティ）」と「時間コミュニティ（テーマコミュニティ）」の3つに分ける。

かつて一体であった「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」は、都市化・産業化の進展により分離されてきたが、高度経済成長期には「ニッポンという大きなコミュニティ」という求心力があった。それが失われた現在、「生産のコミュニティ」（＝カイシャ）は拠り所としての力を弱め、「個人の社会的孤立」（個人が確かな拠り所とできるコミュニティのない状況）の爪痕を残すことになった。そこで、あらためて、人々の生活の場である「地域コミュニティ」の再生がクローズアップされている。（広井 2009：14）。そこに、都市化・産業化でいったん切り捨ててきた「農村型コミュニティ」（情緒的で共同体的な一体意識に基づく関係）がもつ「共同性」の価値の再建も求められると考えられる。しかしながら、社会発展の中で「都市型コミュニティ」（規範的で独立した個人をベースとする公共意識に基づく関係）が生み出されてきたのも事実であり、その心地よさもある。したがって、都市型をベースに、自立した個と個が「公共性」に基づき主体的に結びつくコミュニティをいかに築くか、そこに「農村型」が有する「共同性」をいかに作り出せるかが課題となろう。

また、これからの時代は、人口構成の面からみても、地域に密着した生活時間を過ごす高齢者層の割合が高まる。したがって、具体的な日々の生活の場が営まれる「地域」という「空間コミュニティ（地域コミュニティ）」を大切に考えることはやはり欠かせない。一方、NPOや協同組合、社会起業家等の活動

の創出にみるように、「時間型（テーマ型・あるいはミッション型）コミュニティ」による活動も、社会的意義や自己実現、あるいは世界実現といった意味からますます重要性を持つ。「時間型コミュニティ」は、「公共性」に基づく自立した個の集まりであることを志向しつつ、同じ目的に基づいて形成されるコミュニティであるところから「共同性」の要素も持つと考えられる。この「地域性」と「テーマ性」のクロスオーバーな関係性をいかに作り出すかも、これからのコミュニティの形成原理となる。

以上をもとにすると、これからは、「それぞれの生活の場で、時間型（テーマ型・ミッション型）コミュニティの活動を介して、農村型コミュニティがかつて有していた共同性の価値と都市型コミュニティが求める公共性の価値を融合し、地域コミュニティを豊かに作り上げていくようなあり方」が、生活者として求めていくコミュニティの姿とまとめてみるのではないかな。

ところで、コミュニティは、どのような形成原理を持っているのであろうか。

この点に関して、広井は、霊長類の行動や社会構造の比較研究が明らかにしている「人間が作るコミュニティ」の特徴的な性質（本質）から考えられるのではないかという。それは、人間のみが家族という社会単位をつくり、また、その上に、地域共同体をつくる、といったように、重層的な社会を同時に持つという特徴である。つまり、人間の社会構造を見ると、個と全体社会の間に、中間的な集団が多様に存在する。それは、ばらばらに見えながらも、ある規律の中で重層的に形成され、個と全体社会をつなぐ。この中間的集団の存在こそコミュニティの本質である、とする（広井 2009：22-26）。

個体とコミュニティの内部関係を支える原理は、原型としての母子関係に求められ、個体をソトへと開き、社会全体に「つなぐ」ところには、原型としての父子関係がある。コミュニティ内にある個体は、原初から「内部」的な関係性と「外部」的な関係性の二重性の中に存在するのである。

つまり、個はコミュニティ内存在でありつつ、全体社会との関係性を結び、その中に生きる。重層化されたコミュニティは、全体社会と結びつくところから、それぞれが多様なかたちをとりながらも、共有される

ユニバーサルな価値に基づく形成原理がある。コミュニティが本質的に持つこの性質からも、共同性と公共性の2面性をコミュニティは持つことが説明されよう。

ところで、コミュニティ内存在のつながりの原型を、〈母親〉との関係性にみることができれば、この内的つながりにおいて、「心」の栄養も与えられて、人間としての「いのち」が育まれると考えることができよう。それは、「母語」（「父語」とは言わない）という言葉にみられるように、養育の中で直接的養育者（一般的には母親的存在）から語られる言葉を通して、知らず知らずのうち伝えられるものである。その言葉は、土地で長い年月語られてきた言葉であり、その土地の自然に対峙する中で、生活の歴史を積み重ねてきた人々の思いを孕む言葉である。その意味で、この内的関係の中で、自分の文化的なアイデンティティ、すなわち、その土地ならではの言葉や風土、生活文化に対して愛着を感じる心の土台が必然的に築かれる。そのことが、長じたのちも、自分にとっての原風景とも重なる自然や文化、歴史などに関わるコミュニティを、いわば「根源的な時間の深まり」を感じさせる場とする。それは、自然や地域の文化資源・歴史資源との関係性の結び直しの中に個を深めていくコミュニティのありようを作り出すと考えられる。

一方で、コミュニティは外部とつながることを本質として持つという性質に着目すれば、できるだけソトへと開き、新たな関係性との関わりの中でクリエイティブな融合が生まれいくことも求められる。点在する多様な情報を、それを必要とする人のところに瞬時に結び付け面的に広げていくことができる、今日のメディア環境の進展は、そうしたありようを、後押しをする、ということになる。

言い換えるならば、これからの生活者の求めるコミュニティの考え方として、ローカルな場の中に愛着を求めて共同性の価値を深めつつ、公共性に根ざし様々なコミュニティとのつながりの中で、コミュニティを活性化させ、あらたな多様なかたちを生み出していく。このようなコミュニティの「関係の二重性」を主体的に生きるという生き方の中に、自然と人間、生産と消費、人間と人間という3つのフェーズにおける、あるべき「関係性の結び直し」も生まれてくるのではないだろうか。

2-4. 日本の共同体の原点

今日のコミュニティ再生が、都市化・産業化の進展による「孤独」「孤立」の行き過ぎからの反動としての共同性の回帰であるとするならば、そもそも、共同体意識の強かったころの日本の共同体の価値を振り返ることも意味がある。人間が手を加えた二次的自然の中で、人間と自然の豊かな関係が育まれてきた日本の里山文化の伝統には、その意味で学ぶべきところがあると考えられる。もちろん、そこに懐古的に戻るのではなく、その形成原理の本質を、現代にどう生かすかを考えるためである。

この点について、増田（2011）は、日本的共同の原型は〈農〉という、土地に根ざした伝統的共同であり、その中には、「サブシステム（人間生活の自立・自存）を内包する自治的共同」があったと指摘する⁷⁾。農の営みは、それ自体が生きるために必要な食に関わる営みであり、人間生活の自立・自存の土台を保障する。ここでサブシステムとは、単に生きる糧の生産活動としての農という営みにとどまることなく、人間らしく生きる（よりよく生きるための糧）という営みのすべてを内包するという含んでいる、と考えられるであろう。すなわち、農は本質的に、粗野な自然に対して人間が働きかけをする営みであり、そこには自然との身体的交わりがある。つまり、人間の営みの器である「身体性」の価値に触れることになる。そして、農の営みの結果としてもたらされる実りには、必ず時間を必要とする。そのため、人間が人間であるための意識（心）を働かせる「時間性」という価値も保障する。さらに、土入れ・種まきから実り、そして新たな芽吹きという自然の循環に触れる中で、命の「循環性」を通じて自然界の「いのち」が紡がれていくことの本質も理解することができる。そして、農の生産の営みは一人で行うよりも共同的であることを必要とするため、農の営みには、当然「協働性」が働くことになる。こうして、人間と人間との協働の中から、人間と自然の協働が生まれ、そこに伝統的共同体の価値観が形作られていく。

そしてそれを維持・継続させていくための仕組みとして、「結」や、むら共同体の一員として子どもたちを育てていくための「子ども組・青年組」といった組織構造、村の人々の気持ちを一つにまとめる神社やまつり、伝統の生活行事の様々なしきたりといった文化

が、「自治的共同」のシステムとして生まれ、人々の心をつないだ。むらという地域コミュニティを構成する人々と、祖先からの時間の流れという歴史的時間をつなぐ紐帯となっていたのである。この中で重要なことは、この「自治的共同」の中に、われわれは神々の世界をも内包する点である。そのことによって、共同の中で紡がれる時間の中に、いわばく変わらない価値に触れる「根源的時間」を加えることになる。

<農>の営みは、人間を超越するものの存在を自然界の中に感じさせる。この場合、日本人の感じてきた自然への心性には2つの側面がある。一つは、里に面する山や川の風景に人間に近い山の神や田の神の存在を感じとった。それらの神々はいつも山里の暮らしを見守り、出産や田植えなどのときに里に下りて力を与えてくれる存在として近いものである。その山々は、自分の家の祖先の霊魂が宿り、里の神となっても見守ってくれている、という死者との交流も可能となる場所である。また、湿潤な気候が育む森は、いつも馥郁と包んでくれる生命の源としての温かみを感じるものでもあった。

その一方で、森の中に、人間には近寄りがたいおごそかなものを感じるという面もあった。自然は、時には猛威をふるい、幾多の天災をもたらす。そうした不条理な自然とも折り合いをつけていかなければならない。また、人間にはとても到達しえない力をもつがゆえに、あえて特別なスタイルで、自然の力を借りて本来の「自然的人間」に生まれかわるための場としても自然は活用された。内山(2010)は、その例として挙げられるのが修験道の修験者の営みであると指摘する。時に人間に厳しい不条理な自然ではあるが、その中で人間としての節度の落としどころを見つける。「多層な真理」が共存する自然との関わりの中で、人間は、自己を極度に「深める」。その中で「個」の確立を求める生き方が、西洋型の契約社会で求められた「個」とは違う「日本型個」を生み出した。

このように、日本の「自治的共同」は、自然と人間の関係、すなわち自然への親和性と尊厳的関わりを含み、その中で「節度ある共同体のルール」や「節度ある人間の暮らし方」を育んできた。自然世界との独自の関わり方の中で、日本流の自治の伝統が育まれてきた。日本のむら文化の伝統では、自然をも自治の対象となっており、自然に対する祭りや生活行事が、自然

と人間関係を育むうえで、重要な役割を果たしてきたのである。

<工>を中心とする産業社会は、こうした自然と人間との豊かな関わりを捨象してきたが、今一度、こうした節度ある生き方に立ち返り、自然に対峙する日本人の価値観を取り戻すこと、それこそが、自然と人間の関係性の結び直しに基づくコミュニティの価値であろう。

こうした、日本の共同体の基層にあった「自然と人間との関係性の中の個」という関わり方は、地球環境の時代に、やはり大切である。身体性と協働性を基礎とする<農>の営みの本質的価値に立ち返り、自然の営みの全体性を感じ取ることでできるコミュニティを、日々の暮らしの中にどう作り出すか。自然に直接的に触れる経験を生活の中に持たない人たちが増えていることに加え、基層のところではすっかり近代化し、自然とは切り離れたところにある快適な暮らし方に慣れているわれわれにとって、もはや、疑似的にしか取り戻せない自然と人間との関わりを、どう「本物」の関わりに向けていくか。日本人の生活文化の基層にまで戻ってその価値を復興させることができるかどうか問われているのではないだろうか⁸⁾。そこに、生活者としての生き方も問われてくる。

以上、これからのコミュニティのあり方について生活者として生きるということとの関わりで、理念的に検討してきたが、結局はライフスタイルそのものの価値の置き方からの作り直しが必要であることがわかる。しかしながら、実際には、地域再生や社会的孤立の課題に対して対処療法的に様々なコミュニティづくりが行われているというのが現状であろう。そうした実際のコミュニティづくりは、どのような状況があるのだろうか。それを検討することも、生活者とコミュニティの課題への視点を与えるのではないか。そこで、次に、今日のコミュニティづくりの実際という方向から考えてみたい。ここでは、地域再生が叫ばれる今日の動きの中でも、全国各地で様々に取り組まれている「食と農」「アート」をテーマとするまちづくりに着目する。「食と農」は、上記に述べた自然と人間、人間と人間との濃密な共同的関わりを本来的には内包する営みであり、誰もが関わりやすいコミュニティと考えられる。一方「アート」は、「食と農」とは異なり、生きるための必要性からみれば「なくてもよいも

の」ではあるが、人間らしく生きる上ではなくてはならないものである。このような特徴を持つ両者の営みから、コミュニティ形成の今日的課題を考え、そこに生活者としての視点を検討する。

3. コミュニティ形成の現状からの検討

3-1. 「食と農」のコミュニティ形成の事例

まず、「食と農」をテーマにしたコミュニティ形成の実際を、東日本大震災・福島第一原発事故被災地におけるプロジェクトの事例の中に捉えてみたい。一瞬にして「それまでの平穏な暮らしの中にあつたすべてを失う」という極限状態に置かれた土地の中で、自立したコミュニティがいかに生まれ、どんな課題に直面したかは、これからのコミュニティ形成への一つの範例を示すのではないだろうか。

ここでは、福島大学小規模自治体研究所の支援と協力のもと生まれた「かーちゃんの力・プロジェクト（「かープロ」）」の展開の様子を事例としてみる⁹⁾。「支援を受ける」という受動的立場にあつた被災者が、自分たちの手での自立を求めているはやく立ち上がり、思いを一にする人々との間でコミュニティが形成された。農村型コミュニティの共同性に馴染み生きてきた人々の生き方に、公共性というソトとのつながりをもたらすテーマ性もたらされた例といえる。

「土にへばりついて生きてきた人たちが土から離れると生きる力を失ってしまう。もっと生きる喜びを感じることができる暮らしが必要」（塩谷・岩崎2014: 4）ということで、「農」に生きてきた阿武隈地方の女性たちの中から、地区を超えてキーパーソンがつながりコアとなり、自分たちの得意分野である「食と農」の分野を活かしての活動が展開された。「かープロ」で最初に起案されたのは、それまでの長年の土地の生活の中で培われて生活文化の伝統であつた正月用の餅を作り、同じ被災地の人たちにふるまう「結もちプロジェクト」である。自立へのメッセージとして、誇りある地元の食材を使っていきたい。そのために、放射能の安全基準を独自につくり、その基準に合格した食材だけを使うことにした。基準値を超えてしまったもち米については、他県の団体からすぐに支援の申し出があつて調達が可能となり、ここに、「結もちプロジェクト」は成功を収めた。成功とは、もちろんこの餅を食べた多くの人々に喜びと心のうるおいを与え

たということであるが、根源的には、「<集まる>こと自体が楽しい」という生きた協働のコミュニティが形成されたことにある。

この「結もち」プロジェクトの成功をうけ、「かーちゃんプロジェクト」の継続が検討された。資金は助成金だのみであつたが、理念を明文化し、継続できる活動母体を組織した。任意団体では活動に限界があるので、法人格の団体とし、活動のサポーター制度もつくった。サポーターには年1万円で会員となつてもらふ代わりに、年2回「ふるさとの味」を送り、関係を結ぶ。「結もちプロジェクト」を基幹に、得意の加工品などを扱う「かーちゃんの店」の出店や、「笑顔弁当」「健康弁当」といった高齢者向け弁当宅配の活動などを生み、活動が「多角化」される中で、雇用創出や生活技術の伝承もはかられた。基本は、地元の農産物を活かした「食」から自分たちにできることはなにかという思いであり、それぞれの「自慢の食」をアイデンティティとし、その価値をソトに広げることで、関係性の中の個を感じる生きたコミュニティ形成がなされていった。社会貢献の責務を担う大学との連携もあり、「かーちゃん」たちの活動体制が整つて、その活動は全国に有名になった。「食と農」という共有しやすい価値を要に、広範囲にわたる<つながり>を達成したのである。

しかしながら、活動の「事業化」「多角化」が進み、組織が大きくなるにつれ、活動から離れる人も出てきたという。事業を受託し、雇用を確保したことで焦点化される「経済的自立」と、出発点である「社会的貢献」と、どちらに重点をおくのか。あるテーマ性のもとに集まった異なる人々が、一緒にプロジェクトを進めることの難しさに直面することになった¹⁰⁾。

活動が推進された阿武隈地方は、農村女性であることに負い目を感じざるを得なかつた古い価値観の時代の中でも、たくましく女性農業者としてのアイディアや生き方を開発して発信してきた場であつたという¹¹⁾。こうした彼女たちの思い詰まつた<場>を、震災は根こそぎ奪つたが、誇りを取り戻す拠り所となつたのが、<かープロ>であり<結もちプロジェクト>なのであつた。それは、軌道に乗つたが、次のステップにいたり、「思いか」「経営か」の二つのはざまに挟まれている。ここをどう乗り越えるか。コミュニティの自律的展開の機動力となる「楽しみ価値」（自分たち

のアイデアや営みが社会で活かされる、役立っているという喜び)の追求と、その循環の下支えとなる経営の課題とを、どのように考えていけばよいのだろうか。地域の「食と農」という「いのち」に根ざした活動推進の一方で、個々の善意や思いを拠り所とする共同性の強いコミュニティの活動を、いかに公共性のステージに載せてマネジメントできるか、という課題が横たわるのである。

プロジェクトの萌芽期・成長期は、新しい事業が自律的に生まれてくる。＜食と農＞という、土地に根差した農に生きる女性たちにとっては、誰もが関わられるテーマであるだけに、自発的にどんどんアイデアが生まれる。個人々が、自覚的・自律的なだけでなく、コミュニティ自体が自律的となっていく。生きたコミュニティはソトに開かれ、他の地域でも取り組まれている関連のプロジェクトともつながり、新たなネットワークも築かれていく。しかし、新しい人の参入も増え、活動への思いに温度差が生まれてくると、運営の難しさの方が前面に出る。内発的動機であったものが、いつのまにかソトからの期待に応えるための外発的動機へと移り変わり、いつもそのソトのための「次」に向けての働きかけに追われるうちに、自分たちの活動の意義や価値といった拠り所が見失われてしまうのである。

この事例から考えさせられるのは、公共性の規範意識のもと結び合うコミュニティを、持続的循環の中に置きつづけることの難しさである。「食と農」という営みは、共同性との融和性が高く、思いを一にするサークル内では協調的にものごとがすすめられる。しかしながら、誰もが自分流のものを持っているだけに、それを公共性の中においたときに、次第に各自のやり方や価値観に齟齬が生じ、共同性のバランスが崩れ、活動にゆらぎが生じる。そのゆらぎを修正するのは、おそらく、活動に参加する個々の思いが普遍的な価値に根差して共有されるということではないだろうか。それは、「食と農」というテーマにおいては、人間が人間であるために自然はなくてはならないものであり、その自然と直接的に関わる農、その恵みを直接的に得て感じることでできる食、この二つの価値への思いの確かさであろう。その思いが＜共通の価値＞として共有されるときに、共同性の確かな求心力となり、公共性を支える柱ともなるのではないか。もしそ

うならば、日本人の文化の伝統の価値や自然に対してそもそも抱いてきた畏敬の心を、知識として学ぶという営みを活動の中に併せ持つことが拠り所となると考えられる。

ここで見てきた「農と食」に基づくコミュニティづくりは、今日の地方創生の動きの中で、その土地の地域資源・自然資源・人的資源を活かして地域活性化を目指す取り組みとして、広がっていくであろう。その活動を「事業目標を達成するために」といった外発的動機で行うのではなく、内発的動機に基づき持続循環的な活力あるものとするためには、人間・社会・自然の本質への思いを根底に置きつつ、ソトとの関係性を紡いでいくようなあり方が望まれることが示唆されるのではなかろうか。

また、この問題は、生産者―消費者がその役割をかわえることなく関係を結び合うのではなく、消費する側も生産者の思いを受け止める協働者、言い換えれば精神的な支えとなる協力者となっていくような関係性のあり方を、都市と農村との間でどのように紡げるかということへの問題提起でもある。その意味では、都市の人々も自然の価値への思いを深める営みを、これからの生活者としての生き方の中に大切に考えていかななくてはならない。

3-2. アート・プロジェクトという方法

まちづくりや生きたコミュニティ創造の手立てとして、今、日本に広まっているのが、「アート・プロジェクト」である。ここでの「アート」とは、いわゆる造形作品だけでなく、演劇や舞踊などのパフォーマンスアーツ、また、伝統の生活の中で培われてきたものづくりの技術や農作物の生産技術の継承も含む。

アート・プロジェクトは、ハード開発ではなくソフト重視の地域おこしという時代的課題の中で、また、アーティスト側の表現の多様化の中に生まれてきた。それは、単体としての「作品」を対象としてみることから、作品が置かれる場所との関係性の中で表現されたり、アーティスト自身の身体表現をもって行うパフォーマンスアートといったものが生まれるなど、アートが多様な表現形式を持つように変化したことと関係する。アーティストは、社会から隔離された「アトリエ」という場ではなく、まちの生活の中へと制作の場を求めるようになった。そこに、廃棄されること

になるまちの空きスペースや廃屋、空き家などが制作の場として活用されるようになり、一つの現代表現のかたちを見出していくスタイルが確立していくことになるのである。

そうした中で、アート・プロジェクトは「地域の過疎化や疲弊といった社会問題、あるいは福祉や教育問題など、様々な社会・文化的課題へのアート（芸術）によるアプローチを目的としながら展開している文化事業、ないし文化活動」と位置付けられるようになった（野田2014）。

このようなアート・プロジェクトは、現在2つの大きな流れの中で地域づくりやまちづくりに貢献する場を作りだしている。一つは、「アート・フェスティバル」のかたちである。上述してきたアートの新しい潮流を、「フェスティバル」という特定の時間と場を設定することで集約し、活性化し、その場の魅力の掘り起しや産業創出、観光による人とお金の流れを活性化させようというものである。越後妻有トリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭などがもっとも著名なフェスティバルである。両者は、自然と人間の本質的なかわりのあり方を考えさせる新しい表現に成功し、ゆるぎない地位を確立している。

もう一つは、地域の人々の記憶の宿る場としての廃屋や廃校、空きスペース、古い駅舎などを、アート（アーティスト）の力で復興し再生し、再利用して、場の記憶をとどめ置き、未来につなげ、人と人の交流や産業創出をはかっていこうというものである。尾道空き家再生プロジェクトなどは、その典型であり、空き家が再生事業の中で活用され、若い人の人口流入にもつながり、まちの活性化に寄与している。このように大がかりな展開ではなくとも、様々な地域でアートNPOなどの活躍もあり、地域の民家や場の再生とアートが関わり合って活動が行われているのである。

こうしたアート・プロジェクトによるコミュニティ形成が、なぜ広がりを見せるのか。それは、次のような点が考えられるのではないかと。

第一に、「協働のプロセスを内包する」ということである。作品は、アーティストの着想の中から、かたちをとっていくことになるが、アート・プロジェクトでは、それを、アーティスト個人の営みにとどめるのではなく、ソトに開く形をとる。そして、いろいろな人が一緒になって、「ものを作り出す」プロセスに加

わる中で、共創の変化の中にかたちが生み出されていく。アートの営みを通して、共同の場において、身体感覚を伴いつつ、関わる人々誰もが表現欲求を満たしていくことができる。一つの場を作り上げていくという協働の喜びがある。しかも、それは、内輪のサークルでの活動にとどまるのではなく、社会に開かれた場であるため、共同でありながら公共性を持つというかたちが、活動を意味あるものへと駆り立てていく。このような性質が、アート・プロジェクトに共感する人々の輪を広げているということなのではないだろうか。

第二に、「ものづくり」に長ける、という日本人が古来より持っていた文化の性質になじむという性格である。協働のかたちでのアート・プロジェクトが、まちづくり、コミュニティづくりの性格をここまで持ちえたのは、日本人がもともと生活そのものを愛し、暮らしの中で使う道具も、細やかに作り、季節に合わせて自然を取り入れ、愛しむ暮らしをよしとしていたところにあるのではないかと。

第三に、アーティストの社会に対する問題意識に支えられているという点が考えられる。アートは、感覚的におもしろいか素敵だとかいった受けとめで鑑賞されるだけでなく、人間と社会、人間と自然の現実に対しての何らかのメッセージを発するメディアである。また、アーティストにとっては、地域の人との人間的なつながりを保つことはもちろん大事なことが、基本的にはヨソものであり、地元と適切な距離を置くことが求められる。そのことが、逆に、その場が有する魅力や価値を引き出し、現代社会の課題とのつながりの中での再生を生む。こうして、意志あるアーティストによって、地域の自然や風土、人々の生活の歴史を含んで表現された作品は、一つひとつに込められたコンセプトやメッセージが本質的であり、一貫性、継続性がある。関わる側にとっても意味深くかわることができる。この点が魅力となると考えられるのではないだろうか。

一方で、アート・プロジェクトには、課題も指摘されている。

一つは、アート・プロジェクトが地域再生の手法として一種の流行となっていることである。そうした中で、アートそのもののクオリティが下がる（アーティストの意識が下がる）ことが指摘されている（北川

2014)。メッセージ性や作品としての魅力の弱いアートは、やはり力が弱い。粗雑な表現と表裏一体となってしまう。また、自力でアート・プロジェクトを起こすことができないまちおこしは、プロデューサーのみとなってしまう、多大な費用がかかたりすることになる。

そのようなものとならないためにも、「享受者育て」が大事なことを考えられる。アーティストの活動を側面から支える協働者である市民も、アートのクオリティに対する高い感覚を持ち合わせることで、アーティストの創作活動を低めないためにも必要なこととなろう。

それと関連をするが、アート・プロジェクトは、それに実際に関わった者が感じる満足が高い反面、「まったく関心がない」という人にとっては、意味がわからない、お金の無駄遣いに見える側面を持つことである。「食と農」については、「いのち」と表裏一体のところにある営みであるため、それに対する理解は得やすいと思われるが、「アート」という手立ては、その点が難しいのである。住民不在、地域不在とならないよう、プロデューサーのみとならないよう、どのように生きたかたちで市民主導ものとするかは、やはり課題であろう。その意味で、人間と社会、人間と自然についての本質的な問いとの関わりにおけるアートの価値を理解し、本質に向かおうとするアーティストの創作過程に共振できる享受者であることが、これからの生活者として求められるであろう。そうして、モノづくりに携わる人と人、場と場が「つながる」ところに、真の生きたコミュニティが形成されていくであろう。

4. これからのコミュニティと生活者への視点

以上、理念面とコミュニティ形成の実際の両面から、今日のコミュニティについて多面的に検討してきたが、最後に、これからのコミュニティと生活者としてのあり方への視点について、総合考察を行いたい。

本稿のここまでの論考を通じて述べてきたことは、以下のようにまとめられる。第一に、基本的には、都市型コミュニティが志向される今日の暮らしの中に、テーマコミュニティを取り込み、共同性と公共性のバランスの中で、生きた地域コミュニティを作っていくことが望まれる。それは、地域の価値を大切にする生

き方である。第二に、そのローカリティの中で自らが生きる「ウチ」なる世界は、地域の自然や歴史を愛しむ中に土台が置かれるが、同時に自己完結的にウチ向きに安住するのではなく、「ソト」に開き、「ソト」との関係性の中でコミュニティを広げていくところに、あらたなる創造性も活性化も生まれる。この重層性を持つところが人間社会の本質であり、そこに活力あるコミュニティ形成の鍵がある。第三に、コミュニティづくりの根底に、人間としての節度や立ち位置を考えさせる「自然」というものの価値との接点を持つことが望まれる。自然との関わりは、〈身体性〉と〈協働性〉という人間ならではの営みの原点に立ち返らせる力を持つ。それは地球環境時代という観点からも大切な暮らし方である。

一方、コミュニティ形成の実際として、〈食と農〉および〈アート〉という二つのコミュニティづくりについて検討したが、〈食と農〉のコミュニティと〈アート〉のコミュニティ、両者のタイプが違うものであっても、結局は、共通するところが多いように思われる。つまり、ともに〈協働〉であるところにコミュニティ活力の源がある。表現するものは違っても、〈協働〉の中に「個」の存在を感じ、本質との関わりの中に自分がいるという感覚に満たされる時、生きたコミュニティが生まれる。

しかしながら、難しいのが活動の発展的持続性であった。「よりよいものを作りたい」という理念の共有が難しくなったときに、活動は求心力を失い、クオリティの低下がもたらされる。そして、離散し継続が難しくなってしまう。そうならないためには、〈食と農〉においても、日本人の伝統的共同の中にあつた自然の価値という理念の共有が、そして〈アート〉においても、豊かなクリエイティビティの源となる人間と自然・社会の本質を捉える深い思想性に支えられることが柱となると考えられる。

以上のように、これからのコミュニティのあり方を捉えてみると、それを踏まえた生活者の課題として、次のようなことが結論として導かれるのではないだろうか。

第一に、日々の暮らしが営まれる地域の暮らしの中で、「自然と人間の関係の結び直し」をいかに心がけていくかである。それは、日本の生活文化に根差した「自然に戻る」ことを意識する暮らしである。具体

的には、もし可能であるならば、〈農〉のある暮らしを、ささやかな営みでもよいから土台におく。なぜならば、どんなに小さくても〈農〉の営みを通して、自然と人間の関係の原点に立ち戻ることができる。その〈農〉が少しでも大きくなれば、コミュニティの要である協働性が必ず生まれるからである。仮に、〈農〉そのものに戻る環境がないならば、少なくとも、循環の営みを感じる「自然」に接する場を大切にすることを心がける。まず、自分を取り巻く環境の中に、「自然との関係性」をテーマに置くのである。こうした暮らしを創造するために、一つの方法として、「食と農とアート」という3つをつなぐという考え方を持つのもよいであろう。本稿で述べたように、アートを、いわゆるアーティストが創作する作品ばかりではなく、日常の生活技術の中にある技芸と捉えれば、「食と農とアート」とは、日本人の古来の生活文化そのものとも考えてみることができる。その中には、自然に対する畏敬の念や感謝の念などが内包されている。

第二に、テーマコミュニティの主体者となることである。本稿で取り上げてきた〈農〉も〈アート〉も、協働のプロセスを楽しみ、喜び、その場に集う人々によって生み出される「作品」「産物」を共有する。そこに、相手を手段化しない、「人と人との生きた関係性」が結ばれ、その関係性の中で自分の役割というものを感じ取ることができる。作品を生み出す、あるいは、農作物を生産するという協働の営みに参加するというのが、今度は消費者や鑑賞者の立場に立ったときに、商品や作品として提供される「もの」の背後に、生産者やアーティストの創造の営みのプロセスを感じることができる。その結果、「生産者と消費者の関係性の結び直し」「創作者と享受者の関係性の結び直し」も生まれるのである。商品や作品をモノとしてみるだけでなく、その背後にある人間的営みの豊かさに共振し、生きた関係性が生まれる。ラスキンの文化価値概念を借りれば、ものが持つ固有の価値が、有効価値へと変化していくことになる¹²⁾。そして、都市と農村の生きた関係性や、作者と享受者の生きた関係性も、この中に生まれるであろう。

第三に、「地域コーディネーター」という発想を持って、暮らしをデザインすることである。地域再生が課題となる中、これからの時代にふさわしいコミュニティの創出をプロデュースすることのできる「地域

コーディネーター」という存在が望まれる。本稿を通じて、地域の中にある「自然」の価値をいかに発掘するか、がその仕事の原点と考えられる。そのために必要な素養とは、結局、自然とは何かに対する問い、自然と人間の関係性の歴史への正しい認識、そして、今日の環境科学の知識ということになる。そして、自然を暮らしに活かす生活技術を実践的に学び、自らの暮らしづくりを楽しみながら、社会に活かす。こうした経験と知識の中から、これからのコミュニティづくりに真に求められる「地域コーディネーター」も生まれてくるのではないかと。

たとえ、「地域コーディネーター」という専門職の確立は難しくとも、少なくとも、このような「地域コーディネーター的センス」を身に着けることは、これからのNPOや公益団体、あるいは、企業の社会責任の発想からも大切なことになろう。そうした人材が、社会が増えていくことが、これからの暮らしやすい社会づくりに求められる。また、仕事とすることはなくても、自分自身が「地域コーディネーター」となり、自らの暮らしの周りに生きたコミュニティを形成していくことは可能である。そうした生き方を自覚的に選び取ることができる人がこれからの自立した生活者である。そしてその人の周りに多様に広がるコミュニティが、相互に結び合い、面的にその精神を広げていくところに、定常型社会の中で求められる成熟したコミュニティの形成がある、と結論することができるのではないだろうか。

5. おわりに

これからの生活者として、「自然—人間」「生産—消費」「人間—人間」のそれぞれの関係性の結び直しをいかに考えるかという問題意識を持ちながら、地域再生の時代のコミュニティについての考察を行った。論考を通じ、「自然—人間」の関係性の結び直しを土台に、重層的にコミュニティを形成していくことが望まれるのではないかと、ということが展望された。

コミュニティの存在は、人は自分を取り巻くものとの関係性の中に生きることがその原点であることを気づかせる。その関係性をどのように読み解けるかが、これからの自立した生活者としての生き方であり、よきコミュニティを作り出す手立てとなる。そうした生活者を育てるためにも、「自然と人間の関係性」から

問いを立てるといことが寄与するところは大きいのではないだろうか。

自然との関わりを原体験として持つ層が少なくなる中で、どのように自然の価値に動機づけをしていくか、あらためて、生活者教育の課題として、考えていかなければならない。理論と実践の橋渡しを、いかに魅力的・体系的に行うか、そこが次なる課題といえよう。

注

- 1) この言葉は、広井の提唱する定常型社会の特徴を捉えて、次の文献の中で表現されたものである。天野 2012 : 36
- 2) アリストテレス『政治学』1.1-2
- 3) 日本は、家族以外の者との交流やつながりが薄く「社会的孤独」を感じる人の割合が、OECD諸国で最も高いことが指摘されている(広井 2009 : 17, 2011 : 82)。また、今日的人間疎外状況として、表面上の関係性を重視しつつも、深い内的な相互関係なく、孤独感なき孤立状態という「孤人主義」に日本の若者は陥っているという指摘もある(尾関・亀山 2012 : 283-284)。
- 4) 「生活者」について詳しく論じる天野によれば、「生活者」という言葉の最初の使用者は、1926(大正15)年に雑誌「生活者」を創刊した劇作家の倉田百三である。その時には、「俗世間に抗してストイックな論理で自己を律していく求道者」を指すものとして使われたが、その後、宗教的な色合いから離れ、現実の生活文化の担い手を意味する言葉として使われるようになっていった(天野 2012 : 7)。
- 5) そのような中、2007年には日本生協連の冷凍食品の餃子に極めて高い濃度の有機リン系農薬が混入され、それによる食品中毒が起こり、大きなニュースとなった。本文で述べた生活クラブ生協とは違う生協による事件ではあるが、生協の性格の変化を物語るのではなからうか。(参照 : goods.jccu.coop/qa/data/pdf/occurrence.pdf)
- 6) 地域再生、活性化に関する全国自治体アンケート(2010)において、「人口減少社会という時代状況における今後の地域社会や政策の大きな方向性」を尋ねたところ、「困難な状況の中でも可能な限り経済の拡大成長が実演される政策や地域社会を追求していく」という意識は低く、「拡大成長ではなく、生活の豊かさや質的充実が実現されれば、政策や地域社会を追究していく」あるいは「人口や経済の規模の縮小を前提に、ソフト・ランディングすべく、さまざまな施策等や縮小や再編を進めていく」という意識が高かったことがデータでしめされている(広井 2012)。
- 7) 増田敬祐 : 農的共同体と持続可能な地域、尾関・亀山編 2011 : 70-72
- 8) ここで提起していることの具体的な方法論としては、都市における市民農園活動の活性化や伝統の生活行事を、その意味あいも含めて、深く愛しむような暮らし方のすすめが考えられる。
- 9) 本事例の内容は、塩谷・岩崎(2014)による。「カープロ」は「かーちゃんの力・プロジェクト」が正式名称。福島大学小規模時自治体研究所の協力のもと、阿武隈地区の女性数名をコアにしてスタートした(初期の活動資金の確保できたのが2011年10月)。その翌年には、「かーちゃんの力・プロジェクト協議会」、さらに一般社団法人「ふくしまかーちゃんの力ネットワーク」も設立された(2012年)。
- 10) このプロジェクトの中心者である塩谷の報告による。塩谷は次のように述べている。『いままでのようにつくりたい』という一心で集まり、プロジェクトは始まったが、『いままで』も『これから』も、一人ずつ違う。それは、異なるコミュニティに属していた人びとが一緒にプロジェクトを進める難しさでもある。不安はますます大きくなる。このプロジェクトによって、かーちゃんたちは幸せになったのだろうか。このプロジェクトを続けていく意味はあるのだろうか(塩谷・岩崎 2014 : 36)
- 11) 阿武隈地方は、しばしば冷害に悩まされるという厳しい土地条件の中で、様々な工夫を重ね独自の食文化を育んできた土地柄である。また、里山の丘陵地帯で大規模農業には向かず、他方で工業団地などの都市化からも外れ、「地域振興のはざま」の中で、有機農業や産直、地産地消といった、今日でいう消費者と直接つながる経営スタイルに1970年代から取り組み、暮らしの中で培った技術を活かして起業(ペイドワーク化)し、地域の活性化を目指してきた。その中心的担い手となったのが、この土地に嫁として入った農家の女性たちであったという。(岩崎由美子「かーちゃんたちの生き方」塩谷・岩崎 2014 : 79-98)
- 12) 19世紀イギリスにおいて「生活の芸術化」を提唱したJ.ラスキンは、物がもつ固有の価値を活かすためには、享受(受容)能力が相伴うことが必要であることを述べた(池上 1993 : 132-133)。

参考文献

- 天野正子(1996) : 「生活者」とはだれか、中央公論新社
 天野正子(2012) : 現代「生活者」論、有志舎
 アリストテレス、山本光雄訳(1961) : 政治学、岩波書店
 池上惇(1993) : 生活の芸術化、丸善ライブラリー、
 池上惇(2012) : 文化と固有価値のまちづくり、水曜社
 猪木武徳編(2014) : <働く>は、これから、岩波書店
 碓井崧、松宮朝編(2013) : 食と農のコミュニティ論、創元社
 内山節(2005) : 「里」という思想

- 内山節 (2010) : 共同体の基礎理論、農文協
- 内山節 (2012) : ローカリズム原論、農文協
- 尾関修二・亀山純生ほか編 (2012) : <農>と共生の思想、
農林統計出版
- 河合雅雄 (1990) : 子どもと自然、岩波書店
- 北川フラム (2014) : 美術は地域をひらく 大地の芸術祭 10
の思想、現代企画室
- 熊倉純子監修 (2014) : アートプロジェクト、水曜社
- 坂田修一監修 (2014) : コミュニティ政策学入門、誠信書房
- 塩谷弘康・岩崎由美子 (2014) : 食と農でつなぐ、岩波書店
- 佐々木雅幸ほか編 (2014) : 創造農村、学芸出版社
- 田村正勝編 (2003) : 蘇るコミュニティ、文真堂
- 中村政人 (2013) : コミュニティ・アートプロジェクト、
アート NPO ゼロダテ
- 野田邦弘 (2014) : 文化政策の展開、学芸出版社
- 広井良典・小林正弥編 (2010) : コミュニティ、勁草書房
- 広井良典 (2009) : コミュニティを問いなおす、筑摩書房
- 広井良典 (2011) : 創造的福祉社会、筑摩書房
- 広井良典 (2012) : 地域再生を考える視点—コミュニティー
経済と地域の「自立」、財政と公共政策、第 34 巻第 1 号、
20-31
- 広井良典 (2013) : 人口減少社会という希望、朝日新聞社、
- 橘木俊詔・広井良典 (2013) : 脱「成長」戦略、岩波書店
- 福武總一郎ほか (2011) : 直島瀬戸内アートの楽園、新潮社
- 藤浩志、AAF ネットワーク (2012) : 地域を変えるソフトパ
ワー、青幻社
- 森岡清美他編集代表 (1993) : 新社会学辞典、有斐閣

